

## 調査研究方法検討会かわら版

各位様

### ■ 第 46 回調査研究方法検討会かわら版 ■

去る 12 月 5 日（土）、6 日（日）：TNC 放送会館（福岡）にて第 46 回調査研究方法検討会が開催されました。場所の設定・準備などは伊藤雄平先生のお世話になりました。また、今回、伊藤雄平先生が調査研究方法検討会代表、リサーチ委員長を退任されました。長い間お世話になりました。引き続きご指導よろしくお願い致します。後任として永井崇雄先生が代表となりました。よろしくお願い致します。今回より検討会の報告は各演者の方へお願いすることとなりました。

5 日（土）

○「日本におけるテレビドラマの喫煙シーン」

牟田 広実

本邦におけるテレビドラマでの喫煙およびその関連シーンの現状を明らかにすることを目的とし、これまで 2007・2002・1997 年の視聴率トップ 10 ドラマを調査中である。今回の議論を通し、前向き調査として、ある一定期間、ゴールデンタイムなど思春期以下がよく視聴する時間帯の全番組を録画しておくことで、喫煙以外にメディアが影響を与える暴力や性的シーンなどについても現状を明らかにすることができ、追跡調査などの長期的な研究の礎となる可能性が示唆された。

○「小児におけるスパーサーを使った吸入にエビデンスを！」

～ 定量噴霧式吸入 (pMDI) の薬物動態の研究 ～

西藤成雄

2008 年の「小児気管支喘息治療・管理ガイドライン」では、空気力学的・臨床的検討がなされているスパーサー機種を推奨している。国内には多種のスパーサーが配布されているが、そうしたエビデンスが整っている機種は少ない。「ボアテックス (R)」は、空気力学的エビデンスが有り静電気対策が施されており、機能的には優れている。推奨スパーサーとして挙げるために、同器具にてインターールを吸入した際の血中動態を検討し、臨床的効果のエビデンスを整えたい。

○「Shared Questionnaire System を利用した新型インフルエンザ臨床研究」

橋本裕美

近畿外来小児科学研究グループ (KAPSG) が、学会年次集会終了後直ちに実施した新型インフルエンザの臨床像調査を紹介し、その手法としたアンケート作成 & 解析無料ソフト (Shared Questionnaire System (SQS) : <http://sqs2.net/>) について紹介した。SQS では Source Editor を用いて、設問を自由に作成し、これをプリンターにて印刷、コピーするだけでアンケート用紙の作成ができる。調査後に回収したアンケート用紙はスキャナで読み取り、JPEG 形式で連番を付けて保存。MarkReader により解析することで、極めて短時間にアンケート調査をまとめることができた。

○「新型インフルエンザワクチンの効果の前方視的調査」

橋本裕美

現在全国で大規模に実施されている新型インフルエンザワクチンの効果判定を目的として、当院来院者にケータイを用いた簡単なアンケート調査への協力を呼びかけている。当院ではインフルエンザワクチンの予約を、ケータイサイトから取るようにしているため、ケータイ利用者が多いと把握できており実施可能と判断した。インフルエンザにかかった時あるいは 3 月末までかからなければ 4 月に、ワクチン接種の有無やインフルエンザのタイプなど専用サイトに設けたアンケートに回答してもらおう。ケータイでは回答者が匿名であるためアンケート調査の信頼度は高くないが、少しでも評価に役立てたい。

6日(日)

○「ハイハイの研究の進捗」

伊藤智子

「外来小児科でハイハイの研究」について研究の進捗と第19回年次集会WSの結果の報告。乳児が這おうとする時の下肢の動きが、這うことができる児と這えない児で異なっていた。そのことから、這うことのできない原因のひとつに下肢の感覚や行動発達があると推測された。しかし参加者からは、「調査研究としては最初の目的からずれており、今後、研究手法を変えることも必要ではないか」との指摘があった。

○「乳児期早期の“抱っこ”に関する研究」 鈴木智恵子, 西田啓子, 平岡敦子

抱き方が苦手な母親や乳児が不安定な抱かれ方をしているのを目にすることがある。この背景から、第18回日本外来小児科学会WSで、だっこについて検討し、知見を得、これをもとに、「抱き方」を量的研究として調査し、検討することを研究目的とした。研究方法は、対象を健康な生後1~2か月の乳児とし、保護者と乳児の抱き方の指導前と指導後の撮影を行い、質的データとして分析する。今回、健康な人と人形を用いたパイロットスタディの必要性の助言があり、パイロットスタディを今後行う。

○「予防接種における小児の啼泣パターン(MR第1期)」 山入高志

予防接種時の小児の啼泣パターンを解析する目的で、以下のシステムを考案した。啼泣の強さを0:泣かない、1:弱い啼泣、2:中等度の啼泣、3:強い啼泣に分類し、問診~胸部聴診を3桁、咽頭診察を2桁、接種(注射)時を1桁の数字で表現する。啼泣パターンは0~333の数字で表現される。麻疹・風疹ワクチン第1期接種について啼泣パターンを87例を調査したところ、泣かない(0)33例、1桁(1~3)19例、2桁(10~33)4例、3桁(100~333)24例、分類不能7例であった。検討会の議論では、啼泣の分類としては有用であるが、各啼泣パターンに分かれる要因についてはさらに統計的に調査を進めるべきという意見が出された。

○「小児科医療従事者における新型インフルエンザワクチンの免疫応答」 杉村 徹, 永井崇雄

新型インフルエンザに関する論文の中で交差反応性抗体の存在を示唆する報告が散見される。本研究は、それらをヒントに、一般者よりインフルエンザウイルスの暴露が多いと考えられる小児科外来の医療従事者における、新型インフルエンザワクチンに対する免疫応答を検証する試みである。調査期間は2009年10月から12月で、リサーチ委員ML、ワクチン検討会MLを通じて参加希望者を募った。ワクチン接種前と接種3~4週間後に採血し、新型インフルエンザウイルスの抗体の検査が可能となるまで、採取した献体血清を凍結保存する。本年度のインフルエンザ流行期と重なっている影響や、対象者の背景として妊娠の有無、また研究参加者数の状況について議論された。

本検討会は日本外来小児科学会リサーチ委員会に属しています。本検討会についてご相談がありましたら何なりと下記までFAXまたはメールでお問い合わせください。

連絡先: 〒833-0027 福岡県筑後市水田991-2 杉村こどもクリニック 杉村 徹

FAX: 0942-52-6777, E-mail: sugimura@kurume.ktarn.or.jp